

# 日韓共同理工系学部留学生プログラム報告 (2012年4月～2013年3月)

副島健治

## 1 はじめに

1998年の日韓首脳会議における「21世紀に向けた新たな日韓パートナーシップ」の構築の合意に基づき、具体的な行動計画として「日韓共同理工系学部留学生事業」が立ち上げられた。この事業は、韓国で選抜された高校卒業生を、留学生として日本の国立大学の理工系学部が受け入れるプログラムである。1999年に第一期生の募集が開始され10年間の第1次事業を経て、2009年の募集から新たな第2次事業が行われている。富山大学はこれまでにこのプログラムに基づく留学生（以下、「日韓生」とする）をのべ9人受け入れた。現在2人の日韓生が富山大学に在学中である。

## 2 2012年度の本事業による富山大学への学生配置について

富山大学の理・工学部の日韓生受け入れ可能数は各学科の合計で16人であったが、2012年度の日韓生の新たな配置はなかった。

## 3 富山大学配置の在籍日韓生

これまでに、第7期生までが本学の理学部・工学部から巣立って行った。2012年度の本プログラムの学部在籍者は第10期生2人（理学部1人、工学部1人）である。

## 4 日韓共同理工系学部留学生事業受入れ方法検討ワーキング

### 4.1 構成員

本学における日韓共同理工系学部留学生事業による日韓生の受入れのための準備と円滑な遂行のために「日韓共同理工系学部留学生事業受入れ方法検討ワーキング」（以下、「日韓WG」とする）が2001年4月に立ち上げられ、メンバーの交代を経て現在に至っている。

2012年度のメンバーは石川義和（理学部、日韓WGの長）、柿崎充（理学部）、飴井賢治（工学部）、加藤扶久美（留学生センター）、副島健治（留学生センター）、朝野真（学生支援グループ留学支援チーム）で構成されている。副島がコーディネーターを務めている。

### 4.2 日韓WGのミーティング

2012年度は以下のように、日韓WGのミーティングが3回持たれ、日韓共同理工系学部留学生事業による日韓生の本学受入れ等について話し合われた。ミーティングにはWGのメンバーの他、必要に応じて留学生センター長、2011年度および2012年度の「日韓共同理工系学部留学生事業推進フェア」参加者も加わった。

○第39回（2012年度第1回）日韓WGミーティング

日時・場所：2012年6月5日（火）14：45 留学生センター長室

○第40回（2012年度第2回）日韓WGミーティング

日時・場所：2012年7月3日（火）8：45 学生会館2階多目的室

○第41回（2012年度第3回）日韓WGミーティング

日時・場所：2011年10月29日（月）16：30 学生会館2階多目的室

### 4.3 その他の活動

韓国ソウルで開催される「日韓共同理工系学部留学生事業推進フェア」への参加者と日韓WGのメンバーの一部で、出発直前の打ち合わせを行った。

- 「日韓共同理工系学部留学生事業推進フェア」準備・打ち合わせ（1回目）

日時・場所：2012年7月9日(月) 10:00 場所：留学生センター長室

- 「日韓共同理工系学部留学生事業推進フェア」準備・打ち合わせ（最終打ち合わせ）（2回目）

日時・場所：2012年8月22日(水) 10:00 場所：留学生センター長室

### 5 日韓共同理工系学部留学生事業協議会

本事業参加の国立大学の全国協議会が、2012年度は下記の日時・場所で開催された。本学からは鈴木賢治（工学部）、副島健治（留学生センター）が参加した。

日時：2012年6月11日(月) 13:00

場所：名古屋工業大学鶴舞キャンパス

### 6 日韓共同理工系学部留学生事業推進フェア

本事業の筆記試験合格者とその保護者および関係者を対象として、下記の日時・場所でフェアが開催された。このフェアには、日本の34の国立大学が参加した（資料展示のみの5大学を含む）。

日時：2012年9月2日(日) 9:30～17:00

場所：大韓民国国立国際教育院（韓国 Seoul 特別市鐘路区東崇洞 181）

午前中、全体に対する説明会と各参加大学による1分間スピーチ等が講堂で行われた後、午後、本事業の採用候補者を対象として各参加大学のブースにおいて説明が行われた。

本学からは柿崎充（理工学研究部理学系）、チャピ・ゲンツィ（理工学研究部工学系）、横山雅彦（入試グループ）の3人が参加し、現地雇用の通訳に加え、韓国人学生2人（本学経済学部2年生と国民大大学校からの交換留学生）もボランティアで手伝った。本学のブースへは7人の訪問があり、その他数名に資料配布を行った。

### 7 おわりに

本事業は10年計画で開始されたが、10年を経たのちも「第2次事業」として継続されている。この事業における日本の国立大学への日韓生の配置は、これまで通り、日韓生候補生が「志望調査」でどの大学を望んだかによりほぼ決定され、受け入れようとする日本の国立大学は、自大学が希望大学として選ばれるように努力しなければならないという形になっている。富山大学としても、日韓生が配置されるように努力したが、2012年度は配置が得られなかった。

日韓生の進学希望校は、ネームバリューのある日本の国立大学に集中しがちで、日韓生の配置はおのずとそのような大学に偏るという傾向は否めない。と同時に、学内において日韓共同理工系学部留学生事業への参加の是非が費用対効果の観点からも議論され始めていることとも相俟って、この事業による留学生の受入れを追求することに困難が少なくない現状である。富山大学として、どのように舵を切るかを決断すべき時期なのかもしれない。もし、全学的合意をもって、今後も日韓生の配置を目指すとするならば、大学としての国際戦略の観点から富山大学の将来像を考えた上で、全学をあげての取り組みが望まれると言える。